

路が抑制されることで局所的にP4レベルが維持され、脱落膜化が促進されることが示唆された。

P3-48

チーム医療の質的向上を目指したシミュレーション教育の効果—ノンテクニカルスキルの視点から—

(専攻生：医療の質・安全管理学)

○大野木恵子

(医療の質・安全管理学)

三木 保

本研究では、医療者自身が起こすヒューマンエラーを減らすために、ノンテクニカルスキルをシミュレーション教育にて実施することで、結果的に患者安全が守られる可能性について焦点を当てた。

そこで、医療者から構成されるチームに、チーム医療の質的向上を目的とする臨床に即したシミュレーション教育を企画実施したので、この研修の教育効果について考察を加えて報告する。

今回、特にノンテクニカルスキルの客観的評価の方法として、被験者の行動内容評価をカメラによる行動観察で行った。

研究方法は、医療者のチームに臨床に近いシミュレーション教育を反復体験させる。(シミュレーション教育の概略は、アナフェラキシーショックを起こした患者に対し、正しく6Rで対応が出来きているかどうかである。)実際のシミュレーションにおいては、参加者の頭にウェアラブルカメラ(Panasonic社製 HX-AI-D)を装着し、ノンテクニカルスキルの状況、すなわち言語を含んだ行動様式を評価した。

研究対象は、東京医科大学病院勤務の看護師10名(臨床経験年数2年目から7年目。平均3.5年目)。研究期間は、2017年5月から11月。

その結果は、参加者の行動様式の評価を行ったところ、ノンテクニカルスキル①患者の状況説明を行う、②アイコンタクト、③手振りの回数の検討対象行動が1.5~5倍に増加した。

医療者チームの薬剤の適正な投薬を示すRの数がその研修で増加し、正しい投薬の対応が実施されるようになったことが認められた。

従って、チームにノンテクニカルスキルをシミュ

レーション教育で実施することは、ヒューマンエラーを減少、結果的に患者安全が守られる可能性が期待できるといえる。

本パイロットスタディによって、医療チームにノンテクニカルスキルを磨く教育研修をシミュレーション教育で実施することで、ヒューマンエラーを減少する可能性が示唆された。臨床に即した体験型研修の実施は、チーム医療の質的向上の可能性が期待できるといえる。

今後は、多数例の検討を行う予定である。

P3-49

模擬患者を経験した医科大学職員の意識調査

(総合診療科)

○原田 芳巳、平山 陽示

(医学教育推進センター)

窪田 裕紀、山科 章

(医学教育学)

三苫 博

(総合診療科、北海道大学医学研究院：医学教育・国際交流推進センター)

大滝 純司

【目的】客観的臨床能力試験(OSCE)の拡がりとともに、さらに多くの模擬患者(SP)が必要になると考えられる。本学では2017年度の卒業時OSCEで、学外SP団体に加え、職員もSPとしてOSCEを担当した。一方、大学職員にスタッフ・ディベロップメント(SD)の機会を設けることが求められている。職員がSPとして参加することで、意識の変化があったか、SDの一環として役立っているかどうかを明らかにすべく調査した。

【方法】2017年7月26日に行われた本学の卒業時OSCEにSPとして担当した職員12名を対象に半構造化面接調査を実施し内容分析した。

【成績】10名の参加が得られた。教育に関する職種の経験がある者は3名、「OSCE」および「SP」を具体的に知っていた者は、それぞれ3名と2名(いずれも10名中)だった。SPを経験した感想などでは、「試験や学生の様子などがわかった」「最初は緊張したがだんだん慣れた」「教育現場を実感した」「知識偏重でなく技術・態度もみるということをこれからもやっていくべき」「楽しかった」など肯定的な

ものが多かったが、一部に「シナリオを覚えるのが大変」「卒業判定に影響するので緊張した」「業務と関係しない」など否定的なものも聞かれた。他の職員に勧めたいかという質問に対しても肯定的意見が多く、今後のSP養成に参加する人への意見としては、「多くの職員が経験するとよい」「教育に参加する一体感を感じた」などと否定的意見はみられなかった。練習で工夫した点は、「小さいコピーを作った」、「家族と練習した」などが聞かれた。

【結論】 OSCE、SPについて具体的に知らない者が多かったが、SPとして参加することについて肯定的な意見が多かった。SPとしてOSCEに参加する活動が本来の業務に直接は関係していなくても、学生教育に関わることで医科大学職員としてのモチベーションにつながる意見が聞かれた。学生教育を知るためのSDとして役立つ可能性があることが示唆された。

P3-50

アクティブラーニングにおけるe自主自学の活用事例

(医学教育学)

○油川ひとみ

(医学教育学、医学教育推進センター)

三 苦 博

(医学教育推進センター)

山 科 章

(産科婦人科)

野 平 知 良

(救命救急センター)

三 島 史 朗

(総合診療科)

平 山 陽 示

(英語教室)

ブルーヘルマンス ラウール

【背景と目的】 アクティブラーニングは米国の医学教育では必須であり、日本でもその必要性が強調されている。しかし、医学科全体で実施している大学が国内で32%にとどまり、本学では、実施規模としては医学科全体ではなく講義単位で実施されている状況である。その理由のひとつとしてはアクティブラーニングは教員の負担が大きいと考えられてい

ることにある。本学のeラーニングポータル「e自主自学」を利用し、教員の負担を軽減し、教育効果をあげることにつながる取り組みを報告する。

【方法】 本学で実際に行われているe自主自学を用いたアクティブラーニングの事例を紹介し、授業評価などを利用してそれぞれにおける教員および学生からの評価を検討する。

【結果】 本学では医学科第1学年の症候学入門において大人数講義でPBLを実施するのにeラーニングを用いている。予習課題を提示とPBL形式での講義進行、グループワークのピア評価、復習課題とそれに対する教員のフィードバックなど、膨大な業務量となり得るところをe自主自学使用により負担軽減して、効率的な運営をしている。また、別の講義では、予習課題に加え、講義中にe自主自学で確認テストと自由コメントを書かせて学生の学習がより認知領域の高いレベルで行われることを目指した。臨床実習にもアクティブラーニングは取り入れられ、事前課題として小テストを任意で受験させる試み、および、実習開始時のプレテストの結果により、理解の低い項目を後日TBLでフォローする試みも行われている。学生の評価は「難しい」というものから「楽しい」というものまで様々であった。

【結語】 医学の発展に伴い増加し続ける修得すべき医学知識の量に対し、より認知領域の高いレベルにおける学習を行うためにアクティブラーニングは必要な教育方法である。本学のeラーニングを利用して負担を少なく、教育効果の高い利用方法をさらに開発し、普及させていきたい。

P3-51

Nursing training aimed at improving practical skills ~Utilizing simulation education~

(社会人大学院博士課程4年救急・災害医学)

○冷水 育

(看護部)

三 浦 亜 紀、川 和 田 歩、柳 井 孝 恵

川 島 美 由 紀

(医学部看護学科)

阿 部 幸 恵

【Introduction】 We have a training for nurses with ladder levels II to III. This training is to grasp the state